

P33

固定が困難な乳児外傷の一例

○緑川由紀、椛田絵美、逢坂洋輔、岡 暁子、馬場篤子、尾崎正雄

福岡歯大・成育小児歯

【緒言】乳歯外傷は1~2歳の男児に多く見られ、低年齢児であるため治療も困難を要することが多い。今回我々は、0歳7か月の女児が転倒し、下顎左側乳中切歯が不完全脱臼した症例に遭遇した。歯は下顎両側乳中切歯しか萌出していなかったため、固定が困難であったが保存的治療を行い、後継永久歯交換まで経過観察を行ったので報告する。

【症例】患児：0歳7か月女児。主訴：自宅で転倒し前歯がずれた。既往歴：特記事項なし。現病歴：深夜10時頃自宅で転倒、 \overline{A} の不完全脱臼(挺出・唇側転位)と歯肉裂傷を認めたため、翌日当科に来院。現症： \overline{A} のみの萌出で、左側乳中切歯は動揺、挺出および唇側転位を認めた。また同部の歯肉の裂傷も認めた。【処置および経過】局所麻酔下にて \overline{A} を整復後、リボンとクラスパーにて固定を行った。 \overline{A} の遠心歯肉の裂傷を縫合し、更にその縫合糸を利用して唇舌側歯肉とリボンとを固定した。患児は指しゃぶりを日常的に行っていたため固定期間は約1か月間とした。受傷5歳6か月後、 \overline{I} が萌出し切縁部に軽度のエナメル質形成不全を認めた。受傷7年2か月後、 $\overline{2 I 1 2}$ も萌出し、歯根形成も順調で経過良好である。

【考察およびまとめ】乳歯外傷による後継永久歯への障害は、受傷時の永久歯の発育時期とその損傷の程度によって決まり、構造、形態、萌出などの種々の異常が発現する。またその発現は年齢が低年齢なほど頻度が高い¹⁾という報告があり、乳歯外傷の程度によってどのような影響が発現するかについて、保護者に理解してもらうことが非常に重要と思われた。

P34

飲水時に偶発的に下顎左側第一乳臼歯が完全脱臼した1例

橋口大輔 松石裕美子* 増田啓次* 柳田憲一*
山口登 山座治義 西垣泰一郎 野中和明
(九大・院・小児歯、*九大病院・小児歯)

【目的】

本症例を提示することにより、一般家庭の住居内に常設されている水道の蛇口が、乳歯外傷の原因となり得ることへの注意を喚起する。

【症例】

患児：初診時年齢 1歳9か月 女児

主訴：左下の奥歯が抜けた。

現病歴：患児が入浴中に水道の蛇口から直接水を飲もうとした際、蛇口から顔が離れなくなった。母親が体を引き離れたところFDが脱落したという。ただちにFDを牛乳に浸して近くの歯科医院を受診した。しかし患児の協力が得られず処置困難と判断された。そこで当科受診を勧められ、翌朝当科初診となった。

既往歴・家族歴：特記事項なし

現症：Hellmanの歯年齢はIIA期で萌出歯に形成不全もしくはう蝕とみられる実質欠損は認めなかった。FDは完全脱臼し、歯槽骨内は血餅で満たされ止血していた。FCを含めて残存歯の動揺はなく、FEは未萌出であった。患部以外の軟組織損傷は認めなかった。

X線所見：FD部の歯槽骨に骨折線は認めなかった。

FDの破折根とみられる不透過像は認めなかった。

臨床診断：FDの外傷性完全脱臼

【治療方針】

当科受診時FDの完全脱臼から12時間以上経過していることから再植しても予後不良と判断した。感染防止のため局所の洗浄と投薬を行い、当面経過観察することとした。

【考察】

乳歯の外傷は上顎前歯に最も起きやすく、原因はほとんどが転倒・転落・衝突である。本症例はFDが水道の蛇口に挟まれたことに起因し、完全脱臼した極めてまれな例である。水道の蛇口の内径がFDの歯間幅径よりわずかに大きく、かつ外側壁が乳歯の霊長空隙内に収まるという偶然が重なったものと考えられる。一般住居内には予期せぬところに、蛇口を含めて外傷の原因となりうる設備がある。その原因と対策について考えさせられる症例である。